

若き津波防災大使 招へい事業 Youth Ambassadors for World Tsunami Awareness Day

1. 当事業の目的

本事業は、外務省が推進する国際的な青少年交流事業として、津波をはじめとする自然災害に関する理解を深め、防災・減災への若年層の関心を深めることを目的として実施するものである。

ASEAN(ミャンマーを除く)および中国の高校生を日本に招へいし、東日本大震災の被災地視察、防災関連施設の訪問、専門家との意見交換、ならびに日本の高校生との交流を通じて、災害の実態や復興の取り組みに対する理解を促進する。これにより、参加者が自国における防災活動の推進に資する知見を獲得することを期待している。

「世界津波の日」2025高校生サミットin仙台(*1)において、各国の参加者が防災に関する課題や取り組みを共有する機会を設けることで、将来的に地域社会および国際社会において防災を牽引する意識の醸成を図る。

これらの活動を通じて、参加者間の相互理解と連携を深め、持続可能な未来に向けた国際的なネットワークの構築を目指すものである。

(*1)「世界津波の日」2025高校生サミット in 仙台:

「世界津波の日」高校生サミットは、2015年12月に国連総会において制定された「世界津波の日」(11月5日)を契機として、津波災害に関する理解の促進および防災意識の向上を目的に開催されている青少年による国際的な会議である。本サミットは、2016年に高知県で初めて開催されて以降、沖縄県、和歌山県、北海道、新潟県などで実施されてきた。2020年および2021年は新型コロナウイルス感染症の影響により中止されたが、2022年には新潟県において対面とオンラインのハイブリッド形式で再開された。2025年は、仙台市において初めて開催される予定であり、国内外の高校生約100名(海外約50名、国内約50名)が参加する。参加者は、地震・津波等の災害に関する備えや対応について学び、意見交換を行うとともに、各国青少年間の相互理解と友好の促進を図る。

2. 活動概要

- ・「世界津波の日」2025高校生サミット in 仙台への参加
- ・スタディツアー(防災・減災に関する視察・参観等)
- ・日本に対する包括的理解促進につながるプログラム等

3. 訪日団概要

- ・招聘時期: 2025年11月23日(日)~11月29日(土) 6泊7日
- ・招聘人数: 合計40名(高校生30名、引率10名)
- ・団員構成: 10カ国の高校生・引率
[参加国] 中国/インドネシア/カンボジア/シンガポール/タイ/フィリピン/ブルネイ/バトナム/マレーシア/ラオス ※中国は来日中止

4. 日程

日程	内容	訪問地
11/23(日)	来日(羽田/成田空港) 都内参観(※来日便により)	東京
11/24(月)	オリエンテーション 【アイスブレイク】防災運動会 【視察・体験】そなエリア東京	東京
11/25(火)	スタディツアー(1日目) 【視察】相馬市復興視察ツアー	福島
11/26(水)	スタディツアー(2日目) 【視察】塩釜港湾・空港整備事務所 【視察】震災遺構仙台市立荒浜小学校 【視察・体験】海外防災林	宮城
11/27(木)	「世界津波の日」2025高校生サミット in 仙台(1日目)	宮城
11/28(金)	「世界津波の日」2025高校生サミット in 仙台(2日目) 【参観】瑞鳳殿	宮城
11/29(土)	帰国(羽田/成田空港)	-

5. プログラム

■11月24日(月)【アイスブレイク】防災運動会 13:00-15:00

<スケジュール>

時間	内容
13:00-13:20	開会式(挨拶、選手宣誓、ラジオ体操、プログラム説明)
13:20-13:50	第1種目:救援物資 ジェスチャーゲーム
13:50-14:20	第2種目:防災借り物競争
14:20-14:50	第3種目:災害脱出救済リレー
14:50-15:00	閉会式(結果発表、表彰式、記念撮影)

<参加者の様子>

準備運動のラジオ体操は生徒にとって初めての体験だったようだ。少し恥ずかしそうであったが、笑顔で取り組んでいた。

赤チーム、青チームに分かれて3種目を行なった。不慣れなゲームのルール説明を一度聞いただけでは分かりにくかったようで、スタッフがデモンストレーションをしてみせた。ゲームをやり進めるうちにコツを掴んだようで、徐々に盛り上がっていった。ジェスチャーゲームの際、防災に関するジェスチャーが意外にも難しかったようで、なかなか伝達相手に伝わらず、苦戦している生徒もいた。3種目目の防災障害物リレーが特に一番盛り上がった。人数調整で、引率者チームも飛び入り参加したため、応援する生徒達の掛け声にもより力が入り、大いに盛り上がった。

障害物競走用(災害脱出救済リレー)に新聞紙でスリッパを作ると言われた時、マレーシアの生徒が、新聞紙でスリッパが作れるのかと驚いていた。カンボジアの引率者は、新聞紙で作るスリッパをお土産として自分の国に持ち帰り、是非みんなに紹介したいと言っていた。

<記録写真>



5. プログラム

■11月24日(月) 【視察】そなエリア東京 16:00-17:00

<スケジュール>

時間	内容
16:00-16:05	オリエンテーション(全体案内)
16:05-16:35	東京直下72h TOUR (タブレットから出題されるクイズに答えながら、地震発生から避難までのそなえを学ぶ体験型学習)
16:35-17:00	自由見学 (津波の危険を学ぶコーナー、防災学習ゾーンなど)

<参加者の様子>

皆、タブレット端末を受け取り、イヤホンガイドでガイドの説明を聞きながら体験をした。エレベーター内で地震が起きた際のシミュレーションでは、臨場感があり、実際の震災のようで少し怖かったとの声があった。

タブレット端末のクイズも、最初は使い方に戸惑っている生徒もいたが、皆熱心に取り組んでいた。

クイズの中には、止血方法に関する質問があり、防災運動会で正しい止血方法を学んだばかりだったため、皆自信がある様子で回答し、正解していた。

地震シミュレーターでは、震度7で家具が倒れたり、倒壊したりする様子を見て、驚いていた。

ブルネイの引率者は、無料でこのような施設があるのは素晴らしいし、ブルネイではインドネシアで起きた地震を感じたことはあるが、直接地震を経験していないため、このような施設があると、生徒は勉強することができ、非常に為になると言っていた。

<記録写真>



5. プログラム

■11月25日(火) 【視察】相馬市復興視察ツアー 13:30-16:30

<スケジュール>

時間	内容
13:30-13:45	相馬ICバスターミナル～(車内ガイド)～相馬双葉漁協漁具倉庫
13:45-13:50	相馬双葉漁協漁具倉庫 見学(車窓)
13:50-14:40	鎮魂祈念館(語り部)、慰霊碑 見学
14:40-14:50	松川浦大橋・大洲松川線 見学(車窓)
14:50-15:00	磯部メガソーラー 見学(車窓)
15:10-16:30	防災備蓄倉庫見学(30分)、ワークショップ(50分)

<参加者の様子>

バスで移動中、相馬市観光協会の方から、防災信号機、津波浸水看板の存在、津波が止まったという盛土構造の6号国道バイパス、漁具倉庫、メガソーラーなど、各所の説明を聞いた。津波が真下まで来たという松川浦大橋を見た時、当時襲った津波の高さに驚き、生徒達から声が上がった。また、津波の被害を受けたところ、受けていないところが同じ地域内であったため、地形を知ることが自分の命を守るのに非常に大事だという話を聞いて、皆納得していた。

鎮魂祈念館内では、語り部の五十嵐ひで子氏の話聞いた。ご自身も悲惨な被害にあわれているにも関わらず、明るく、力強く話をしているその姿に心を打たれ、当時の様子を想像した生徒たちは皆言葉を失っていた。

防災備蓄倉庫の視察では、広さ、備蓄品の多さに驚き、ローリングストックのシステムや、自治体レベルでの連携体制、停電した際にも施設が稼働できる対策が取られていることに感心していた。

防災士の渋谷紀子氏による防災ワークショップでは、日頃の備えによる防災・減災の講義を聞き、その後、新聞紙スリッパとペットボトルランタン作りを体験した。新聞紙スリッパは、防災運動会の際も紹介されていたので、「覚えているよ」と自慢げに手慣れた様子で作成している生徒もいた。また、災害時は段ボールのような身近なものを活用して簡易トイレを作る方法なども紹介され、試しに座ってみた生徒も頑丈さを体感し、驚いていた。この視察を通じ、自分の命は自分で守る大切さや、防災・減災の方法などを学び、実りの多い時間になった。

<記録写真>



5. プログラム

■11月26日(水) 【視察】塩釜港湾・空港整備事務所 09:30-11:30

<スケジュール>

時間	内容
9:30-10:10	仙台塩釜港(仙台港区) 中央公園展望台
10:10-10:20	バス移動 (中央公園展望台 → 高砂コンテナターミナル)
10:20-11:00	仙台塩釜港(仙台港区)高砂コンテナターミナル管理棟

<参加者の様子>

仙台塩釜港中央公園展望台に行き、仙台塩釜港の港湾全体像を視察した。東北大震災前後の写真を見ながら、どれだけの災害を受けたか、被害と復旧についての説明を聞き、震度6強、津波の高さが7.2メートルもの威力がどれだけの影響を波止場に与えるのかを当時の写真を見て、大型船が乗り上げている様子、コンテナが破壊されている様子、コンベイヤヤーが倒れて折れてしまっている様子を見て、津波のもたらす影響がどのくらいの大きさか、かなり理解を深めたようだ。

その後、バスで高砂コンテナターミナル管理棟まで移動した後、屋上まで上り、コンテナターミナルや海を見ながら説明を受けた。小雨と風も吹き、生徒には寒かったようだが、積極的に質問もし、有意義な時間を過ごせたようだった。

生徒からは、下記のような質問がなされた。

- ①仙台港の貨物取扱い量は？⇒US\$1億で、東北地域の80%を占める。
- ②取扱い品目は、どんなものか？⇒輸入は、木材、電動機械類、合成樹脂類。輸出では、ゴム製品、紙パルプ、リサイクル原料類など。
- ③輸移入、輸移出は仙台とどこの国か？⇒主に中国、韓国、米港など。
- ④津波被災したとき、コンテナの中身は大丈夫だったのか？⇒中身はすべてダメになってしまった。特に冷蔵コンテナはひどい状況だった。
- ⑤そのコンテナの数は？⇒約5,000個全て中身はダメになった。

<記録写真>



5. プログラム

■11月26日(水) 【視察】震災遺構仙台市立荒浜小学校 13:00-14:30

<スケジュール>

時間	内容
13:30-	震災遺構 仙台市立荒浜小学校 見学
-14:30	ビデオ鑑賞

<参加者の様子>

2班に分かれて、校庭から視察を開始した。校舎は被災した当時のまま残され、教室・廊下には様々な展示物、写真などで生々しく被災の様子を伝えており、ガイドを担当してくれた先生の話聞きすることで、当時の様子がより鮮明に伝わり、皆、真剣な面持ちで見学していた。

震災以前、校庭の奥にあった体育館を避難場所とし、そこへ避難する訓練をしていた時期もあったが、震災前年に、屋上に避難場所を変えていたおかげで、学校に避難した全員が助かる事に繋がったという話に大きく頷いていた生徒が多かった。

2Fまで津波が押し寄せたその跡が残っており、天井にも飛沫などの跡もあり、教室のバルコニーの柵が曲がっている状態を見て、写真や映像ではなく、実際の遺構を見る事によって、生徒達に訴えるものも大きいようで、説明の後には、必ず、「え～」というどよめきが上がった。

4Fでは、当時の映像を交えたビデオを鑑賞したが、実際に今、自分達がいる場所にかつて襲った出来事を見ることは衝撃的だったようで、中には、涙を流している生徒もいた。

こうした震災の遺構が、しっかり残しており、ツアーまで実施しており、日本だけではなく、海外の人達にも伝えてくれる取り組みは素晴らしい、と引率先生が感動していた。

荒浜小学校の見学は、学生達にも分かりやすく、学校という馴染みのある場所なので、特に感慨深いものとなったようだ。

備考:2班には、複数社のテレビ取材のカメラと記者が帯同した。

<記録写真>



5. プログラム

■11月26日(水) 【視察・体験】海岸防災林 15:00-16:30

<スケジュール>

時間	内容
15:00-15:15	講義(海岸公園センターハウス)
15:15-15:25	移動(海岸公園センターハウス→海岸防災林・深沼海岸)
15:25-15:40	見学・ガイダンス(海岸防災林・深沼海岸)
15:40-15:45	集合写真撮影(海岸防災林・深沼海岸)
15:45-15:55	移動(海岸防災林・深沼海岸→荒浜圃場)
15:55-16:15	体験(荒浜圃場にて樹木周りの除草)
16:15-16:20	移動(荒浜圃場→海岸公園センターハウス)
16:20-16:30	質疑応答

<参加者の様子>

ふるさと杜再生プロジェクト・センターハウス館長の阿部氏のあいさつの後、再生プロジェクトの説明を聞いた。300年～400年かけて植樹・育樹されて来たものの、津波で一気に壊滅状態になってしまったため、現在30年構想に則って植樹・育樹をしており、2014年以来約30,000本を植樹してきた。

その後、9kmある防波堤の上を歩きながら海岸の視察をし、海岸防災林を背景に集合写真撮影、慰霊碑の見学、遺構の見学を実施した。日没が近くなり、少し空が暗くなり始めた中、最後に桜の苗木を代表者6名で植樹をし、センター職員の方に鎌の使い方を教えてもらいながら、全員で除草作業をした。

晩秋の海辺のため、少し寒かったものの、終始皆真剣に説明を聞き、視察と体験を楽しんでいた。質問内容としては、防波堤の高さと長さ、防波堤が作られた時期、海岸について、慰霊碑の菩薩について、育樹されている松の木のケアの方法、一年で松の木はどれくらい成長するのか、海で泳ぐことは可能なのか、津波後そのまま残されていた家の基礎について、など多岐にわたった。

<記録写真>



5. プログラム

■11月27日(木)『世界津波の日』2025高校生サミットin仙台 10:00-16:45

<スケジュール>

時間	内容
10:00-12:00	分科会(第1回)【発表・討論】 <ul style="list-style-type: none"> ・ セクション1:各校、各国・地域の自己紹介及びプレゼンテーション ・ セクション2:ユニット毎ディスカッション・アクションプラン作成
12:00-13:00	昼食
13:00-14:45	分科会(第2回)【発表・討論】 <ul style="list-style-type: none"> ・ セクション2:続き ・ セクション3:ユニット代表者によるプレゼンテーション
15:00-16:00	開会式 <ul style="list-style-type: none"> ・ オープニングアトラクション ・ 国連での津波の日イベントの報告 ・ 参加国・地域紹介 ・ 開会宣言 ・ 主催者挨拶 ・ 共催者挨拶
16:15-16:45	分科会(第3回)【討論・統括】 <ul style="list-style-type: none"> ・ セクション4:ユニット代表者によるディスカッション、グループのアクションプラン作成 ・ セクション5:グループ代表者によるまとめのプレゼンテーション

<分科会テーマ・グループ分け>

1. より良い復興

- ・ カンボジア
- ・ インドネシア
- ・ シンガポール

2. 多様なステークホルダーの参画

- ・ ブルネイ
- ・ タイ
- ・ ベトナム

3. 伝承と災害文化

- ・ ラオス
- ・ マレーシア
- ・ フィリピン



<記録写真>



5. プログラム

■11月27日(木) 外務省主催 歓迎レセプション 18:00-19:30

<スケジュール>

時間	内容
18:00-19:30	<ul style="list-style-type: none">・ 主催者挨拶・ 乾杯・ 歓談・交流・ 高校生発表・ 高校生パフォーマンス・ 歓談・交流・ 仙台市・宮城県パフォーマンス・ 歓談・交流

<参加者の様子>

タイとベトナムの生徒がサミットや滞在中の感想を発表した。

日本の高校生(聖和学園高等学校)によるすずめ踊りの演武が盛り上がり、恥ずかしながらも一緒に踊っていた。男子生徒は伊達政宗の登場(伊達武将隊)に関心を示していた。侍の格好をした人を見るのが相当珍しかったようだった。

日本語を勉強しているタイの学生は、日本人高校生とすぐに日本語で仲良くなり、同じテーブルで楽しく交流していた。

<記録写真>



5. プログラム

■11月28日(金) 『世界津波の日』2025高校生サミットin仙台 10:00-11:00

<スケジュール>

時間	内容
10:00-11:00	総会・閉会式 <ul style="list-style-type: none">・ 主催者挨拶・ 共催者挨拶・ 来賓挨拶・ 分科会報告・ 高校生記者の取材発表・ 大会宣言発表・ 閉会宣言・ 全体記念撮影

<参加者の様子>

主催者、共催者、来賓の挨拶があり、各分科会の代表者が報告をした。分科会Ⅲを担当した生徒は、被害をより少なくするため、建物の構造強化の支援、復興までの長期的な計画と、人間が最低限必要な物資等の短期的な計画を立てることが重要で、安全かつ早い復興には、政府や地方自治体のみならず、家族や友人等とのコミュニケーションが必要、それにはより良い連絡・伝達手段を作り、広めることが肝要との発表を行った。その後、河北新報高校生記者による取材発表、大会宣言発表後、無事にサミットが終了した。

<記録写真>



7. 参加者の感想(抜粋)

●もっと時間があれば、植樹活動をさらに行いたいと思いましたし、日本の皆さんの防災に貢献するために、先生を含むすべての学生が植樹を体験できる機会がもっとあればと感じました。地域やさまざまな関係者の間で防災の備えがとても大切であること、そして若い世代に語り継ぐべき物語があるということも学びました。こうした語り継ぎは、未来のリーダーとなる彼らにとって特に重要なことだと思います。さまざまなスタディツアーでは、津波の影響を実際に目にし、多くの理解を深めることができました。荒浜小学校や家屋の跡地を訪れたことで、被害に遭われた方々への共感が生まれ、失われた多くの命や、直接・間接的に影響を受けた人々のことを思うと、とても胸が痛みました。一方で、JTBの皆さまが日本の伝統的な価値や文化を大切にされた食事を準備してくださったことがとても嬉しかったです。挨拶や食事のマナーなど、日本文化の礼儀作法を学ぶことができ、文化理解が深まりました。また、私たちの食事制限にも気を配り、通訳や引率の方々が常に気遣ってくださったことに心から感謝しています。レセプションナイトも大変楽しく、文化公演があり、日本の踊りを実際に体験することができました。外務省(MOFA)の皆さま、素晴らしいレセプションナイトを本当にありがとうございました。今回のプログラムに参加する機会を与えてくださった主催者の皆さま、特に外務省に心より感謝申し上げます。ブルネイにこのような貴重な経験の場をくださり、本当にありがとうございました。Arigatogozaimas.

●このプログラムで最も強く印象に残ったのは、日本がテクノロジー、地域の協力、そして長期的な計画を組み合わせ、人々を自然災害から守っている姿でした。地震博物館や津波被災地を訪れ、自然の力の大きさを感じると同時に、しっかりと備えることで地域が強くなれることを実感しました。植樹活動を通して、防災は大規模な仕組みだけでなく、環境を守るための小さな日々の行動の積み重ねでもであると学びました。また、子どもから大人、政府まで、すべての人が防災の責任を意識する「防災文化」をつくることの重要性にも気づきました。日本とカンボジアの大きな違いとして、災害への備えのレベルや緊急時の行動の規律が挙げられます。この気づきは、帰国後に学校や地域で今回の経験を共有し、カンボジアでもより多くの人に防災について学んでもらいたいという気持ちにつながりました。日本で築いた友情やつながりは、帰国後も続いていくと信じています。これからも日本の友人たちと交流を続け、環境保護や防災教育についてさらに学んでいきたいと思っています。

●日本の人々が自然災害に対して示す強さと回復力には、本当に驚かされました。特に、地震と津波からわずか1年で港がほぼ80%の機能を回復したことや、地域の方々が語り部として経験を伝え、落ち着いて最善の判断を下すことの重要性を伝えている姿がとても印象的でした。スタディツアーは本当に目を開かされる体験でした。まさか、津波が来る前には誰かの家が建っていた場所に自分が立つことになるとは思ってもいませんでした。住民の方々が感じた無力感、想像することしかできません。しかし同時に、彼らができる限り早く日常生活に戻ろうとした強さには深く感動しました。今回得た知識は、シンガポールに持ち帰り、同僚たちと共有し、防災・減災の重要性を広めるために役立てたいと思います。日本への今回の旅は本当に驚きと学びに満ちていました。日本の皆さんのこれからの発展を心より願っています。貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。

●日本に到着した日から、主催者の方々やプログラムに関わる皆さんが、とても温かく迎えてくださいました。訪問期間を通して、多くの意義深い場所を見学し、日本文化の美しさに触れることができました。みんなで一緒に植樹をしたことは、環境への責任をより強く感じさせ、たとえ小さな行動でも良い影響を生み出せることを思い出させてくれました。また、さまざまな場所を訪れる中で、日本が自然を守り、リスクを管理し、災害に備えている仕組みについて理解を深めることができました。これらは私の国で見えてきたものとは大きく異なり、長期的な計画や地域の意識づくりの大切さを学ぶ貴重な機会となりました。さらに、交流活動を通して、多くのASEAN諸国の学生や日本の学生と知り合うことができました。彼らは皆とても優しく、勤勉で、規律正しく、国や文化、環境は違っても、お互いの文化を学び合おうとする姿勢が強く印象に残りました。このプログラムを通して、私はかけがえのない知識と忘れられない思い出を得ることができました。学んだことは将来の学びや地域への貢献に必ず役立つと確信しています。また、学校の後輩たちにもこの経験を伝え、彼らも学ぶ意欲を高められるようにしたいと思います。